

書籍カバーの活用による読書活動の推進効果

阿部 由貴子

紙媒体の書籍の存在意義、紙媒体の書籍を扱う書店の立ち位置が問われている中で、依然として街中、屋内など至るところで紙媒体の書籍を所持し、読書をしている人は居る。そして、読まれている書籍は書店に並べられている時のままではなく、カバー（いわゆる書皮。本研究では「書店等での入手時に書店が無料で提供してくれる、書籍を覆う紙」と定義する）がつけられていることがある。電子書籍が発展する中、紙媒体の書籍の付属品に着目する機会は少なくなりつつある。しかし、それは着目されていないだけであり、焦点をあてれば紙媒体の書籍を発展させる活路を見出すことができるのではないかと考える。

本研究は、書籍にかけるカバーについて、実物を収集し、特徴を分析し、被験者実験を行い、カバーが読書行為にどのような影響を与えているか可能性を検討するものである。書籍にカバーをかけることで、どのような付加価値をつけることが出来るかを把握すれば、書店での購入意欲推進、それに伴う読書意欲の推進効果が期待できる。

研究を行う際、(1)カバーが人目を引く（目立つ）ものである場合、読書をする主体の読書意欲が高まる、(2)カバーの書店名の字が大きくなると読書意欲が低くなる、(3)カバーの使用頻度が高い人ほど読書をする機会（量、手にとる回数、頻度等）が多い、(4)カバーにより読書速度に変化が出るという4つの仮説を立てた。東京都と茨城県の書店から実物を収集し、アンケート、被験者実験から仮説の検証を行った所、仮説(1)に関してはカバーが人目を引く（目立つ）ものである場合、読書をする主体の読書意欲が高まるが、読書の最中はカバー自体の色が派手であればあるほど読書行為を阻害する要因にもなりうる事が分かった。仮説(2)については、書店名が大きく印字されたカバーによっては読書意欲が低められることは無いが、それ以外の意味を持つ短文については読書意欲を低めるかもしれない可能性があることが分かった。文章の内容によっては読書意欲を低める可能性があると言える。仮説(3)については、カバーの使用頻度が高い人ほど読書をする機会が多いが、読書頻度については差が見られなかった。カバーと読書頻度の関係性は薄い、カバーをかけることと読書を行う機会については相関関係が有ると言える。仮説(4)については、カバーごとに多少のばらつきは有るものの、使用するカバーにより読書速度に変化が出るとはいえないことが分かった。

今回の調査では、読書活動を普段から行う人が対象であったが、読書活動そのものに興味がない人も存在する。また、調査を行う際、実物を収集する地域数、アンケートを実施した人数、被験者実験の人数と条件などに検討を加える余地がある。検討を重ね、普段から読書を行わない人々にも手にとってもらえるようなカバーを開発し、カバーが新たな書店の顔としてより一層着目されるようになれば、読書活動の更なる発展の道が開ける。

(指導教員 辻慶太)